

Paradise Lost の一考察

— Eve の落下の夢 —

山 口 和 世

A Study of *Paradise Lost*

— Eve's Dream of Fall —

Kazuyo Yamaguchi

I

Satan は Lucifer として最高位の天使であった時、神の座に昇ろうという野心を抱き、神に反逆するが敗れる。その結果、地獄に落とされた Satan は、神に対する復讐のために新しく創造された人類の父祖を破滅させようと企んで地球に赴く。彼が地球に到着して復讐の機会を狙っているある夜、Eve は次のような夢を見る。

Taste this [A fruit of the forbidden tree], and
 be henceforth among the gods
 Thy self a goddess, not to earth confined,
 But sometimes in the air as we, sometimes
 Ascend to heaven, by merit thine, and see
 What life the gods live there, and such live thou.
 So saying, he [Satan in angelic shape] drew nigh, and to me held,
 Even to my mouth of that same fruit held part
 Which he had plucked; the pleasant savoury smell
 So quickened appetite, that I, methought,
 Could not but taste. Forthwith up to the clouds
 With him I flew, and underneath beheld
 The earth outstretched immense, a prospect wide
 And various: wondering at my flight and change
 To this high exaltation; suddenly
 My guide was gone, and I, methought, *sunk down*,
 And fell asleep; (V. 77-92. italics mine)

この夢は、Satan に唆された Eve の墮落を警告していると考えるのが最も一般的な解釈であろう。Eve の夢の中での行為は Satan の神への反逆と対応関係にある。彼女は傲慢の故に Satan に欺かれ、禁断の木の実を口にする。そして、空を飛ぶことは本来人間には不可能であるにもかかわらず、自分が天使のように空に舞い上る夢を見る。有頂点になっている Eve

は突然落ちてしまう。

しかし、この夢は Eve がやがて禁断の木の実を食べ、原罪を犯すということを予示するにとどまるであろうか。本稿は“sunk down”（「落下」「下降」すなわち「墮落」）が現実面での行為として単刀直入に描かれているのではなく、夢の中で予示されているという事実に注目することによって、“sunk down”の中に上昇方向への動きが同時に内包されている点を強調し、人類の父祖の墮落を *felix culpa* であるとする解釈を補おうとするものである。

II

我々は暫く *Paradise Lost* を離れて、下降の夢の事例とそこに見られる特徴を挙げる必要がある。夢見る人が夢の中で下降の旅を経験するという話はまず非文学的分野で現われる。¹ 夢は shamanism において重要な位置を占めている。すなわち、夢は世俗の人間を聖別し、shaman にする力を持つ。shaman 候補者は夢のなかで冥界遍歴する途上 initiation を受けた後、shaman として蘇る。shaman 候補者が行なう冥界下降には天界上昇が加わる場合が多い。

このような、夢見る人を鍛え、変容せしめる冥界旅行の話は、いわゆる未開社会や特定の地域にのみ限られるものではない。理性に貫かれた社会であると伝統的に考えられてきた Greek にも、夢の中の冥界下降が同様に見られる。² 古代 Greek の Orpheus 神話、および Orpheus 教の起源は shamanism に求められる。shaman は修練期間を洞窟などに隠棲し、睡眠、あるいは、脱魂の状態で過ごす。その時、彼の魂は冥界へ自由に旅することができる。

わが国においても『古事記』に次のような話が載っている。³ おほなむぢは洞窟に籠って物忌み生活をした際、夢の中で根の国を訪れる。そこで彼は蛇の室や百足と蜂の室に入れられたり、八田間の大室に喚びこまれて、すさのをの頭の虱をとらされるという試練を受ける。そして、その旅において彼はすせりびめ、生大刀、生弓矢、天の詔琴など王たる資格を示すものを手に入れる。根の国から戻るや否や彼はもはやおほなむぢではなく、大国主という王に変身する。

このような形で世界各地に見られる冥界下降の夢は、やがて文学の領域に姿を現わすことになる。すなわち、Orpheus 神話の影響によって、冥界を下降遍歴する夢の中の旅という motif が文学作品に確立されるに至る。その代表例は Virgil の *Aeneid* である。Aeneas は Rome 建国の使命を果すために冥界へ下る。⁴ 冥界への下降の旅こそ、Aeneas を Rome 建国の祖とする前提にして、必須の条件となっている。Rome 建国という神意を実現するのに相応しい人物となるためには、Aeneas の魂は冥界で鍛えられる必要がある。

冥界への下降の旅は異教世界から Christ 教化された後の時代の叙事詩や物語詩にも受け継がれる。冥界への下降の旅の後に天上への上昇の旅が更に追加されるに及んで、⁵ 旅する者の

魂が旅の過程で救済されるという宗教的な意味が濃厚になる。地下の冥界への旅と天上への旅は、かくして文学作品を構成する重要な要素の一つとして定着するようになる。⁶ その顕著な例として、ここでは Dante の一種の vision である *Divine Comedy* を挙げるに留めておこう。Dante が天国に到達し、神の聖顔を拝するに至るには、まず地獄を、続いて煉獄を巡ることが必要であった。冥界への旅自体、起源的、原初的に夢見る人を鍛練する力を備えていたのであるが、宗教的な救済の意味が附与されることによって、下降はすなわち上昇である、あるいは、下降は上昇を約束するものであるという逆説的解釈を生み出し、伝統的なものとして確立したと思われる。上昇は既に下降の中に存在し、あるいは、下降を先条件とするのである。それは、死が新生の前提であるとする極めて一般的、伝統的な観念の一変形表現であると考えられる。

III

さて、我々は再び *Paradise Lost* に戻ろう。*Paradise Lost* を執筆するにあたって、Milton が叙事詩の伝統、convention を非常に強く意識していたことは周知のとおりである。したがって、Eve の下降の夢がその背後に持つ伝統についても、Milton は十分に熟知していたと思われる。況や、下降の夢が応々にして冥界下降の形をとり、上昇を約束する夢であることは、極めて archetypal なものであることは先に述べた。

Eve が、続いて Adam が禁断の木の実を食べて墮落してしまふまでの楽園は *locus amoenus* の諸特徴を備えている。すなわち、*ver perpetuum* の理想郷、樹木と泉と芝生を組み合わせた景色、様々の種類の樹木からなる森、草花の絨毯、木蔭、川、芝生、泉など Homer から Theocritus を経て、Virgil へと継承された理想的景観の *topos*⁷ が見られる。Enna の野、Daphne の楽しい森、Castalia の泉、Nyseia の島、Amara の山など、神話に名高い麗しの場所を凌ぎさえする場所として、Eden は描き出されている。また、その周囲は

crowns with her enclosure green,
As with a rural mound the champaign head
Of a steep wilderness, whose hairy sides
With thicker overgrown, grotesque and wild,
Access denied; and over head up grew
Insuperable highth of loftiest shade,
Cedar, and pine, and fir, and branching palm,
A sylvan scene, and as the ranks ascend
Shade above shade, a woody theatre
Of stateliest view. Yet higher than their tops
The verdurous wall of Paradise up sprung:

(IV. 133-143)

の描写が示すごとく、Eden は *hortus conclusus* を形成している。⁸ このような Eden にあって、神にも似た姿の Adam と Eve,

Two of far nobler shape erect and tall,
 Godlike erect, with native honour clad
 In naked majesty seemed lords of all,
 And worthy seemed, for in their looks divine
 The image of their glorious maker shone,
 Truth, wisdom, sanctitude severe and pure,
 Severe but in true filial freedom placed; (IV. 288-294)

は、全くの *otium* の状態ではないが、草木、花の世話をするという程度の *negotium* を果されているだけである。

しかし、彼らの墮落後の Eden には著しい変化が生じる。

Earth felt the wound, and nature from her seat
 Sighing through all her works gave signs of woe,
 That all was lost. (IX. 782-784)

Earth trembled from her entrails, as again
 In pangs, and nature gave a second groan,
 Sky loured and muttering thunder, some sad drops
 Wept at completing of the mortal sin
 Original; (IX. 1000-1004)

罪と死は閉じ込められていた地獄の門から出て、楽園を支配し始める。自然の変化が続いて起き、地には酷寒酷暑がもたらされる。それに伴って同類の変化が至るところに現われ、獣、鳥、魚はそれぞれ相い争う。Adam と Eve の墮落以前は “another heaven” (VII. 617) であった Eden は、今や Satan が落とされた地獄の似姿を呈するようになる。ここには、Eve の夢が持つ下降の pattern が投影されていると言えよう。

楽園に諸々の変化をもたらした Adam と Eve は楽園を追放される。

whereat

In either hand the hastening angel caught
 Our lingering parents, and to the eastern gate
 Led them direct, and *down the cliff as fast*
 To the subjected plain; (XII. 636-640. italics mine)

彼らは天使の指図に従い、楽園の周囲をとり囲む崖を下って、苦闘と忍従を強制する荒野の空間へと旅立たねばならない。ここにも Eve の夢の下降の pattern が見られる。Adam と Eve が Eden を後にする姿は一見悲劇的である。しかし、彼らの Eden からの下降の旅は摂理に

導かれたものである。なぜなら、Adam と Eve の子孫である Christ によって彼らの罪は贖われる。更に、その再臨の時、至福の空間がもたらされる。

far happier place
Than this of Eden, and far happier days. (XII. 464-465)

New heavens, new earth, ages of endless date
Founded in righteousness and peace and love
To bring forth fruits joy and eternal bliss. (XII. 549-551)

Satan が Eve を誘惑するために言った、

happy though thou art,
Happier thou mayst be, (V. 75-76)

という言葉は、Satan が全く予期せざる文脈において、Adam と Eve にとって現実のものとなることが約束される。Raphael に未来の人類史を告げられた Adam の喜び、

O goodness infinite, goodness immense!
That all this good of evil shall produse,
And evil turn to good; more wonderful
Than that which by creation first brought forth
Light out of darkness! (XII. 469-473)

that suffering for truth's sake
Is fortitude to highest victory,
And to the faithful death the gate of life; (XII. 569-571)

に見られるように、Adam と Eve の墮落は *felix culpa* であると言えよう。

IV

Milton は叙事詩執筆の準備期と見なされる離婚論争期以来、善と悪を峻別する二元論的思考を克服し、「悪のなかから善」をという道徳的一元論に拠っている。⁹ 人類の父祖の墮落は単なる墮落で終るのではなく、Christ 降誕による人類の救済、再臨による永遠の神の国の到来を約束するものである。Milton は墮落という負の運動よりも、墮落に内包されている正の方向に重点を移している。したがって彼は Eve を落下時点で夢から目覚めさせている。Eve は、

but O how glad I waked
To find this but a dream! (V. 92-93)

と述べ、涙を浮かべる。激しい悔恨の念を抱いていると思われる Eve の態度は、炎に包まれて清火天から真逆様に九日九夜に及んで底なし地獄へ落とされた後、なおも飽くなき復讐を追

求する Satan とは対照的である。Satan の場合は、一旦地獄を脱出したものの、地獄は常に彼とともにある (“The hell within him, for within him hell/He brings” [IV. 20], “Which way I fly is hell; my self am hell” [IV. 75])。Adam と Eve を陥れるのに成功した彼を待つのは、またしても地獄への落下に他ならない。Eve の落下の夢は罪による彼女の墮落を予示するものではあるが、Satan の落下とは明らかに区別されなければならない。¹⁰ 更に Milton は、Adam と Eve の墮落に伴う諸変化よりも人類の未来史の vision と物語に比重を置き、Adam と Eve が荒野へ旅立つところでこの叙事詩を完了している。

Milton 自身、人類の父祖の墮落と救済の約束をうたうに際して、まず地獄と混沌界に視点を置く。後に彼は光に呼びかけ、神と神子を語る。すなわち、彼が光と天上の世界の描写に移るためには、Orpheus 同様、下降の旅をする必要があったのである。

先に Eve の第二の夢 (Raphael が Adam に山頂で人類の未来史を vision と語りによって予示するのを後に残った Eve は夢のなかに見る) の構図は、この夢が読者自身のものとして体験されるように構成されていると述べた。¹¹ 今また我々は Eve の下降の夢についても全く異なった角度から同様のことが言えるだろう。すなわち、「語り」の観点からである。Eve の落下の夢は、彼女が Adam に報告するという形で述べられている。したがって、これまで進められてきた第三人称形式の代りに第一人称形式が採られることになる。予示的、神秘的な性質の夢を依然として信じていた十七世紀英国の人々は、夢を見る Eve と一体化したに相違ない。

先に指摘したように、Milton の時代の英国人は予表論的思考をその行動の基盤としている。¹² 彼らは聖書の物語を歴史的事実と同一平面上で把握し、聖書のなかの物語や事件が現実の生活のなかで再現されると信じたのである。十七世紀英国の清教徒たちにとって、清教徒革命を成功させた彼らの歴史は、Daniel 書における「千年王国」の予言を実現させるもの、すなわち、最頂点に到達した上昇の歴史として映ったのである。彼らは、人類の父祖による墮落がもたらした落下の方向、そして、それ故に生じた神の王国に至る上昇の方向という人類史を殊の他意識したと考えられる。彼らが上昇方向に対する強烈な意識に貫かれた歴史観に好んで拠っているということは、裏を返せば、上昇の前提となり、上昇を可能ならしめる落下、下降に対する意識が鋭かったということでもある。人類が現実生きてきた、種々の紆余曲折を経ながらも、全体としては上昇の軌跡を描いている人類史は、父祖の落下、下降を契機としなければ存在しないものである。上昇と落下の夢は古い詩や新しい詩、あらゆる時代のあらゆる民族の夢や神話のなかに見い出すことができ、極めて存在論的な意味を持っている¹³ が、Eve の落下の夢、そのなかに潜在的に約束されている上昇方向への運動は、作者である Milton 個人、更に十七世紀当時の読者、特に革命政権崩壊により失望を味わった清教徒たちにとって、彼らの存在様式そのものと深く関わるものであったと推測される。王政復古後、革命政権の要人であった Milton が *Paradise Lost* の執筆に向けた原動力の一つは、深い挫折感、幻滅

→落下の感覚であり、そして、それ故に未来に託した上昇への限りない希求だったのではないだろうか。¹⁴ Eve の落下、下降の夢に内包されている上昇方向への運動は、夢が第一人称形式によって語られているために、十七世紀の人々の心に強く訴えたであろう。彼らは人類の父祖に起きた事柄に対して、自己のものとして強い共鳴を示したと思われる。Eve の夢に続く Adam と Eve の墮落、そして、神の摂理を道標とした二人の荒野への旅立ちは、まさしく清教徒が持つ歴史観の pattern に沿ったものであると言えよう。

十七世紀英国において支配的であった救済史的歴史観と予表論的思考形態、下降の夢が持つ原型的な意味、叙事詩における下降の夢の伝統、これらが重層的に重なりあうところから Eve の落下の夢は創造されたと考えられる。それ故に、人類の墮落という “Things unat-tempted yet in prose or rhyme” (I. 16) が普遍性を獲得し、“this great argument” (I. 24) となり得たのであろう。

註

1. Mircéa Éliade, “Rêves et Visions Initiatiques chez les Chamans Sibiériens,” *Le Rêve et Sociétés Humaines*, eds. Roger Caillois and G. V. von Grunebaum (Paris, 1967), pp. 315-323. 中村恭子(訳)「シャーマンの夢と幻覚」、『エピステーメー』7 (1978), 36-47.
2. E. R. Dodds, *The Greeks and the Irrational* (Boston, 1957), pp. 140-149.
3. 西郷信綱『古代人と夢』(平凡社, 1972), pp. 123-175.
4. もっとも Aeneas が訪れる冥界には死後祝福された人々が住む Elysium がある。
5. この起源は、Plato, *Republica*, X. 13-16, Cicero, *Somnium Scipionis* に遡り、中世の指導的書物である Martianus Capella, *De Nuptiis Philologiae et Mercurii*, Bernhardus Silvestris, *Universitate Mundi*, Alan of Lillie, *Anticlaudianus*, Aelius Spartianus, *Severus* などに数多く見られる。
6. 拙稿「トポス：夢のなかの旅——その起源と十七世紀に至る系譜——」『院生論集』第七号, 1-32.
7. W. R. Crutius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, trans. W. R. Trask (Princeton U. P., 1973), pp. 183-202.
8. 聖書、叙事詩の楽園が山頂に位置している (*Ezekiel*, XXVIII, 13f., *Purgatorio*, XXVIII, 91-102, *Orlando Furioso*, XXXIV, 48, *The Faerie Queene*, III, vi, 43) のと同様に、Eden はそれを取り囲む荒野とは急な崖によって隔絶されている。なお、Maud Bodkin, *Archetypal Patterns in Poetry; Psychological Studies of Imagination* (Oxford U. P., 1934), pp. 99-102 は「山」が伝統的に至福の場所の image として用いられていることを指摘している。
9. 新井明『『楽園喪失』と離婚論』、『ミルトン研究』(金星堂, 1974), p. 23.
10. Diane McColley, “Eve’s Dream,” *Milton Studies* XII, ed. J. D. Simmons (U. of Princeton P., 1979), p. 38 は Eve の誕生と Sin の誕生, Raphael の言葉 (V. 496-499) と Satan の言葉 (V. 78-80) の対照手法について “the perverse parody of an episode before the episode itself” であると指摘しているが、Eve の落下の夢と Satan の地獄落ちについても同様のことが言えるであろう。

11. 抽稿, 「*Paradise Lost*の一考密——Eveの夢と予表論——」, 『東海学園女子短期大学紀要』第十三号 (1978), 147.
12. 同上, 139-141.
13. Ludwig Binswanger, 『現象学的人間学』荻野恒一, 宮本忠雄, 木村敏 (訳) (みすず書房, 1976), pp. 94-129.
14. Milton は上昇という空間運動に大きな関心を持っていたようである。*Paradise Lost* における良い上昇の例には, 山頂に導かれる Adam, Enoch の昇天があり, 悪い上昇には Babel の塔, 神の座に昇ろうとする Satan の野心などがある。